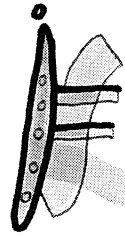


アメリカの大学の教育と研究



UCSCでの生活をとおして

榎本 博明

名城大学・教職課程部

□ はじめに

昨年の四月から今年の三月まで在外研究員としてアメリカのカリフォルニア大学サンタ・クルーズ校(UCSC)で過ごす機会を得た。

サンタ・クルーズは、サンフランシスコから百五十_キほど南西に下った海岸沿いにある小都市である。四月に到着したときから真夏のような暑さに驚かされ、それが十月くらいまで続いた。湿度が低いためあまり汗はかかないが、じりじりとやけどしそうな日差しが五時、六時まで続く。最初のうちこそ抜けるような青空にこれぞまさに思い描い

ていた通りのカリフォルニアだと感激していたが、連日頭の上でんと居座られるときすがに人の気力を吸い取ってしまうような日差しと青空が恨めしく思えてきた。サンタ・クルーズは、じめじめした日本と違い、からつとして非常に気候が良かったが、それほど暑くない時期の日本から出かけていきなり知的な作業にはあまり適さない気候なのではないか。初めの半年間で雨が降ったのはわずか三日くらいであった。休日には賑わい、とくに夏になると多くの人が繰り出してくる西海岸のリゾート地といった感じのところである。

一九八九年のサンフランシスコ大地震の震源地だったそ

うで、私がつどりついた頃のダウンタウンは崩れかけた建物が目立ち、閉鎖している店も多く荒廃した雰囲気であったが、秋頃からおくればせながらの復旧作業が始まり、クリスマスのは大きな本屋も新装開店し、しゃれた喫茶店もいくつかでき、街路樹も整えられ、こじんまりとした美しい町に変貌していた。

□ 授業風景

私は、自分の専門を性格心理学、発達心理学、社会心理学および臨床心理学の交差領域というふうにかなり緩やかに規定しているが、教育に関することには当初ほとんど関心がなかった。比較文化的な授業に参加したのをきっかけに日本における教育機能への関心が呼び起こされたりはしたが、それも異文化に身をおいた多くの者が漠然と感じる程度のもので過ぎないのであろう。したがって、UCSC

えのもと・ひろあき●一九五五年東京生まれ●専攻は人格・発達・社会心理学、とくに適応と自己形成をめぐる問題●著書に『ふれあいの心理学』（翻訳 有斐閣八三年）『子どもの問題行動事典』（編著 北樹出版八七年）『夫婦・親子の心理学』（日本実業出版社八八年）『現代心理学講義』（編著 北大路書房九一年）『人間科学としての心理学』（編著 勁草書房九二年）『もう恋愛で悩まない』（ソニー・マガジンズ九三年）など。

で一年間過ごしたとはいっても、個人的興味で勉強・探索する過程で触れた断片しか見えておらず、組織や制度といった自分を越えた視点から鳥瞰しないと見えてこないようなものは、まったく視野にはいってこなかった。

アメリカの大学のシステムについては本誌既刊号に詳しく紹介した論稿があるので、ここではセミナーの教室での感想を中心に述べさせていただけことにしたい。私が主として関わったのは、心理学専攻の四年生を対象とした心理発達における異文化間研究についてのセミナーで、参加学生は二十数名であった。

シラバスについては、はじめに一学期分の計画表が、第一回・何月何日（何曜日）・テーマ・テキストの該当箇所・必読論文のリスト・紹介するビデオといった要領で、二十回で終了なら二十回分記入されたものが配布されるという計画性には驚かされる。レポートのテーマは十六回目のときまでに教員に申し出て、二十回目るときまでに提出する、というようなどころまで指示されている。毎回のテーマや必読文献が紹介され、セミナー等の内容や進め方が詳細にわかるので、学生にとっては親切なやり方であろう。たとえば、学内の書店に行き、教員（科目）ごとの教科書や副読本をパラパラめくれば大体の内容の見当をつけるこ

とができる。ここまでは日本でも同様である。だが、アメリカの場合はさらに図書館に行つて、必読文献のリストにあがつている学会誌などの論文に目を通すことで、セミナー等の詳細な内容や要求水準まで見当をつけることができる。より適切な科目の選択のために好ましい制度といえる。もちろん、休講やら予定していた臨時講師の都合などによる計画の変更は起り得ることである。その場合も、教員は教室で先の予定の変更案を学生にきちんと告げ、いつの何回目ときには何がテーマとなるかを学生が常に把握しているように留意する。

このような計画性と同時に、かなりの自由度があるのもアメリカの大学の特徴ではないだろうか。まず形式的な面でいえば、教員の個人的知人のなかからそのときどきのテーマに縁の深い人物を呼んで話を聞いたり、教室でやるかわりに教員の家でホーム・パーティ形式で飲み食いしながら討論したりすることもある。内容面でいえば、教員の側から解説したり整理したりするよりも、学生たちが自分なりの意見を披露するのが中心となっていた。筋書きがあつて進行するというより、学生たちのある意味では勝手気ままな意見に振り回されながら漂っているという感じであつた。知識の伝達というか正確な解説が日本であればもつ

と必要なのではと思うこともあつたが（私の貧困なコミュニケーション能力ゆえに実態を正確にとらえているわけではないのだが）、教室では教員の知や考えを伝えることより、学生自らが考え自分の意見を持つことに重点が置かれていたのであろう。専門家によるより正確な知識や見解が知りたいとき、もつと考えを深めたいときなどは、参考文献としてあげられているものに積極的に当たればよいのである。各回のテーマに関連のある教科書や副読本の部分や必読論文があらかじめ指示されているため、学生としてはかなりの分量の読破という予習を強いられる。教科書と複数の副読本が指定されるのが普通であるから、一回分として五十ページくらい読まなければならない。論文も二十〜三十ページくらいのものが各回のテーマに関連して二つ三つ指定されている。併せて百ページくらいを一回分として読んでおく必要がある。普通は一科目が週に二回か三回あるため（月・水・金という組み合わせと火・木という組み合わせのいずれれかとなる）一科目のために毎週二〜三百ページにおよぶ文献を読むことが必要となる。これは、アメリカの大学での勉強の厳しさとしてよく紹介されるものである。しかし、日本人がアメリカで見聞あるいは実際に学生として体験する場合は、母国語でなく外国語である英語の文

献を大量に読むことになるから強烈に感じるのであって、日本語であれば週に二〜三百ページ、つまり本一冊分相当の文献を読むことなどさして苦にならないのではないか。それに、一科目が週二〜三回あることでもわかるように、

ひとりの学生が履修していく科目数が日本の場合と比べて極端に少ない。また、三カ月におよぶ夏休みをはじめとして休みが多いうえ、全学期出なくてもたとえ三学期のうち二学期だけ出るということでも、うまく計画すれば単位は順調に満たしていけるようである。したがって、履修している科目の必読文献が多いとはいっても、学生はけっこうゆとりのある生活を楽しんでいるように思われる。

ディスカッション中心の科目が多いからしつかり予習していなければならず厳しいといわれることもあるが、それは控えめを美德とする日本で育ったために感じるわけで、アメリカではものごころつくかつかないかの時点から事あるごとに自己主張するようにうながされる。だれにとっても自分自身の経験を越えた視点を持つのが難しいので、極端な場合にはかなり偏つたもの未熟なものであっても自分のものの見方を堂々と披露し、相対立する意見には正面から議論を挑む習慣ができあがっている。それが日常なのである。ディスカッションなしにひたすら教師の言葉に耳を

傾けるようにといわれるほうが、アメリカ人の学生には苦痛であるに違いない。したがって、アメリカの大学の授業が学生にとってとくに厳しいとは思われない。

□ 評価について

日本の大学では、自己評価の導入を御上から迫られ大わてといった感があり、自己評価の対象や方法をめぐる議論百出、そもそも自己評価とは何か、その理念は、のような難しい議論も登場し混乱を極めている。一方で現実路線で無難に済まそうという動きも少なくないようだが。

アメリカでは、大学や教員・授業を対象とした評価はごく当たり前のこととして行われている。私が滞在したUCSCでは、受講した学生たちによる個々の授業および教員に対する評価が毎年一冊の本にまとめられ、学内の書店で売られている。その書店の書棚には、過去三〜四年分が並んでいた。ばらばらめくつてみただけなので確かなことはいえないが、「学生の質問やアドバイスの求めに丁寧に応じてくれる」「非常に博識で、深味のある講義であった」のような学生の声がまとめられていた。学生による評価を気にしてのことなのかもしれないが、教室では視聴覚教材をふんだんに用いたり、学外のゲスト講師をときどき招い

たりと、学生の興味をそらさないような工夫がなされていた。教員の性格もあるのだろうが、日本の教室ではこんなやりとりでこれほど時間をかけたりはしないと思われるくだらない（授業に直接関係しないという意味で）質問が殺到してもいちいち丁寧に応じていたのには驚かされた。

大学によつては、教員や事務職員のかなり個人的な情報も開示されているようである。州立大学のなかには、教職員の専門や主要な業績だけでなく、年俸や略歴までわかるリストが学生用としても配布されているところがあった。

州立大学でも年俸二千万円を大きく越える教授がいる一方で、四十代になつても年間契約に近い形でかなり低い年俸で教授の手伝いのようなことを続けざるをえない研究者もあり、研究や教育の能力・実績にまったく関係なく年功序列で給料が決まる日本と違つて、頑張るだけ評価が上がり、それに伴い報酬も上がっていくという形で、教員評価が機能している。大学に対する評価も、地域社会その他により行われているのである。評価など、大学自ら、教職員自らが自覚してやつていけば、外から導入を求められる必要などないであろう。今になつてやかましい論議が生じるのは、絶えざる自己評価とその向上を怠つてきたことを示すものではなからうか。評価主体や評価目的をめぐる複雑な問題

もあろうが、各組織・各人がつねに真剣な自己評価を行つていけば、今さらあわてるようなことではない。

企業などでは、組織レベルでも個人レベルでも、実績が数字となり切実な結果を伴つて表れてくる。これに対して、大学では、教員がどんな研究生生活をおくり、どんな教育実践をしているかに関係なく、毎年一定数の学生が入学し、一定の収入が得られる。組織としては、出生数の減少に起因する学生数の減少という切実な事情に直面して、目玉となる特色を出そうとするなど創意工夫がみられはじめてはいる。しかし、個人レベルでは、どんな人間でも、どんな生活をしていても、いったんもぐりこんでしまふと誰でも勤まつてしまうようなところがある。アメリカとは精神風土が大いに異なり、実際的な評価が行われている企業をみても日米の評価システムの違いは大きい。当然、大学および教職員の評価もアメリカのやり方は馴染まないであろう。しかし、熱心に勉強し多くの努力や時間とともに金も研究に投じている教員と、研究者としても教育者としても向上心が乏しく家計以外にほとんど私費を使うこともないような教員が、年齢が同じなら給料も研究費も同額という日本の大学の実態は、やはり合理性を欠くといわざるをえない。

□ 研究環境

大学教員の研究環境は（アメリカの大学といつてもいろいろレベルがあるわけだが）、概して日本の大学教員のそれとは比べものならぬくらいに良いのではないか。

図書館にはかなりの金をかけていると思われる。土、日も含めてほとんど毎日夜遅くまで開かれている。蔵書数が多いだけでなく、検索システムが他大学とのネットワークも含めて充実している。コンピュータの端末を用いて、キーワードで論文や雑誌・新聞の記事を検索し、要約を打ち出すこともできる。こうしたメリット以上にこのような作業を自らしなくても良い立場にある教員が多いのである。

日本でも助手や秘書を個人的に雇っている教員もないわけではないが、それはまれなことである。研究用の文献のコピーどころか教材や学生用の配布資料のコピーさえも自ら行ない、不意の来客の応対や事務とのやりとりも自分でやるのが普通であろう。ちよつとした消耗品の補充から備品の購入に関する業者とのやりとりも、他にやってくれる人などないわけである。アメリカの大学では、その種のことは秘書や助手がやってくれる。秘書を通してアポイントメントのとれている者とだけ会えば良い。必要なものはテ

イーティング・アシスタントやリサーチ・アシスタント（ともに学生のアルバイトで、ほとんどの教員に専属でついている）に言っておけば自然にそろろう。講義や演習のためのコピーなど教材作りばかりでなく、教室での運営もティーチング・アシスタントに任ずことができる。試験問題の作成や採点まで任ずこともあるように聞く。研究面でも、こういったテーマで文献を集めてほしいとか要約一覧を作つてほしいといえ、リサーチ・アシスタントが検索・収集したり、コピーをとったり、要約してくれたりするし、手間のかかる調査・実験データのインプットだけでなく解析までやつてくれたりする。みんながそれほど優秀で使えるというわけではないのは言うまでもないことではあるが。

学生のアシスタントの制度は、学生にとつても奨学金代わりの良いアルバイトとなっているわけだが、教員にとつてもちよつとした雑用から研究・教育活動の補助にいたるまで頼れるので、非常に有利な制度といつてよい。たとえば、U C S C では、一人のリサーチ・アシスタントに月々二十万円くらいが大学から支払われていたようだが、日本では運良く文部省の科研費がとれたとしても、文系であればこのようなアシスタントを年間ひとり雇う額にもならないのが普通である。最近カリフォルニア州は危機的な財政

難で、テニユア（終身雇用の保証のようなもので、助教授以上の者の多くが獲得しているもの）の教員も一部解雇しなければならなくなるのではとの声も耳にしたが、それでも大学教員の研究条件は日本と比べると格段に恵まれていると思われる。そこに至るまでの競争が厳しいということも忘れてはならないが。

□ 学生にとっての教育環境

図書館をはじめとする諸施設は充実し、キャンパスは广大で自然も豊か、学費や生活費を稼ぐための学内アルバイト制度も充実しており、学生が勉学に励む環境としては良好な大学がアメリカには多いといえよう。UCSCでは、図書館は夜十一時頃まで、コピー・センターは夜八時までやっているので便利であった。学内郵便局は四時に終わるが、よく利用した。広大なキャンパスには、うっそうと繁った杉林あり、はるかかなたまで続く草原ありで、散策したり寝ころんで読書したりしているうちにあつという間に一日が過ぎる。

学内の学生アルバイトとしては、ティーチング・アシスタントやリサーチ・アシスタントのほかにもいろいろある。学内事務、学内の食堂の店員、学バスの運転手など、学内

のいたるところで学生が働いていた。

日本の学生たちと話すとき、アメリカではだれでも好きな大学に簡単にはいれるし、はいるときだけ難しくてあとは放っておいてみんな卒業させる日本の大学よりずっと良いという声をよく聞く。たしかに日米の違いは大きいが、アメリカでは日本にいる学生の想像も及ばないような階層差が存在し、出身家庭の経済力が行く大学を決定するという面も大であるように思われる。日本の国立・公立に相当する州立大学でも授業料はかなり高い。UCSCでも、一学期分で五十〜六十万円くらいと聞いた。また、日本のような受験地獄は存在しないとしても、高校時代の成績で行ける大学の範囲は自ずから絞られてくる。そして、アメリカは別の面で非常に過酷な競争社会である。他者との絶えざる競争にさらされており、能力のない者、努力しない者はどこまでも落ちていく。入学してから能力的・性格的に合わなければ容易に他大学に移れるといった自由度はあるが、誰でも好きな大学に自由に行けるわけではないようだ。

アメリカの大学では先生が厳しく指導してくれるので、いったん入学したら簡単に卒業させる日本の大学と違って卒業までに実力がつくからうらやましいという声も聞く。たしかに授業風景のところでは触れたように、各教員の課す

必読文献の量は多い。積極的な意見表明も求められる。だが、これはひとりの学生が履修する科目数の違いや小さい頃からのしつけに反映されるような文化的背景の違いも関係しており、単純に比較できる問題ではない。

また、アメリカの大学の教員は、日本的な観点からすると、かならずしも面倒が良いとはいえないようである。

たとえば、週に二回各二時間ほど設定されたオフィス・タイムがある。これは各教員が自分の都合に合わせて独自に設定するのであるが、その時間帯には教員は必ず研究室にいる。その間に学生たちは訪問し、質問したり、アドバイスを求めたりする。他の学生と重なり待たされることも多いので、前もってアポイントメントをとる必要もある。逆にいえば、そのわずかな時間帯を逃すと教員をつかまえるのは難しい。教員の性格や教員と個々の学生の親しさにもよるが、原則として学生はオフィス・タイム以外のように教員を煩わすようなことはしない。日本では、一般にこうした枠組みを設けないので、研究室にいる限りこちらがどんな状況にあらうと学生を追い払うわけにはいかない。学生にしてみれば、教員を見かけたらいつでも相談できる。アメリカでは他人の時間を浪費することには非常に神経をつかうし、他人のスケジュールを尊重するが、日本では形

のないものにはあまり気をつかわないということだろうか。いずれにしても、アメリカのシステムは、教室で積極的に発言し質問し、オフィス・タイムのアポイントメントも積極的にとりつけて訪問するという学生向けのものであり、日本に多い受け身の学生には適さないように思われる。

所属する学科なりコースなりで単位を取るべき科目の相当部分が必修として定められている日本の大学と比べて、アメリカでは履修科目を個人がかなり自由に選択し組み立てていけるという特徴もある。非常勤講師も含めて、かなり多くの授業を用意し、豊富なメニューを学生に提示する余裕はうらやましいものである。だが、これも小さい頃から自分独自の好みを主張するよう促されるという文化的文脈の中でこそ生きる面があるのであろう。

日頃日本の学生たちの主体性のなさや積極性の乏しさにあきれることの多い私も、サンドイッチをくださいというだけではだめで、パンの種類に始まり、チーズは入れるか、何チーズにするか、オニオンは入れるか、ロースト・ビーフはコールドがいいか温めるか、ペッパーは入れるか、マスタードはつけるか、どのように切るかといった一連の質問に答えて自分の好みを指定しない限りサンドイッチにありつけないのを煩わしく感じることはしばしばであった。